

温州みかんだけでも10種類程度、まだ名前のない新品種まで合わせると約60種類の柑橘を栽培する紀州原農園。元は温州みかんを中心に栽培する一般的なみかん農家だったが、昭和40年代、価格暴落に直面。経営の危機を回避するために多品種栽培へと転換したという。「海から4キロほど離れ、標高100メートル前後にある日当たりのいい当園地、さらに冬でも温暖な気候と穏やかな陽光が降り注ぐ和歌山は、一年を通して様々な柑橘の栽培に最適な場所なんです」と語るのは、七代目の原拓生さん。

多品種栽培は価格暴落などのリスクヘッジだけでなく、経営の安定という利点もある。「当園では9月の極早生みかんからはじまり、冬には温州みかんやシークワーサー、年明けのポンカン、そして5月の甘夏などの収穫。また6月から8月は南高梅の収穫や梅干し作りなどの作業があり、一年中アイドルタイムがありません。それにより経営は安定し、常勤の従業員を雇用することができます。また消費者目線で考えると、いろんな品種があるということは、選択肢が豊富にあるといえます」。しかし思いつきで品種を選び栽培しているわけではない。「全国のようなジャンルの料理人と直接取引していますが、甘いだけでなく苦味や酸

味が強いもの、火を通すことで美味しくなるものなどニーズは様々で、それらに応じるように栽培を始めた品種もあります。全ての要求に応えられる訳ではありませんが、誰も知らない種類の柑橘を育てるのは楽しいですからね」と微笑みながら語った。とはいえ多品種栽培は、言うことを聞かない子もいれば大人しい子もいるような小学校の教室みたいなもの。剪定や肥料のやり方など、それぞれの個性に合わせる必要があり大変だという。「それがやり甲斐でもあるんですね笑」。そして今後も和歌山の豊かな自然が育てた柑橘の「楽しさ」をもっと多くの人に伝えたいと思います」と戦略的な農業経営とともに和歌山の柑橘への思いを語る原さん。その眼差しはまるで樹上完熟したみかんのようにキラキラと輝いていた。

柑橘が好きなみかん農家の多品種栽培という戦略と未来



太陽の光たっぷり温暖な和歌山。柑橘好きの農家の苦労は、楽しみでもある。

①大学卒業後、自ら農園を継いだという園主の原拓生さん。多品種だけでなく、新品種の栽培にも積極的に関わる。②関東から来県し、原農園で働く夫婦。「天気がいいと収穫も楽しい」と語る。③小さい方が紀州みかんで種があり、大きい方が九年母(くねんぼ)といい、皮が硬くあまり美味しくない。これらが自然に交配し、今の美味しく種のない温州みかんが生まれた。④樹上完熟の柑橘はまろやかな味わい。葉を付けて収穫するのでより美味しそうに見える。⑤原さんの後ろのビニールハウスは特に珍しい品種を育てている、お気に入りの場所。

紀州原農園
住所／田辺市上秋津932-3
連絡／taku.harafarm@gmail.com



全国の食通が注目するヴィラ アイダ。ハーブや野菜は自ら育てたものを使うことが多く、他の食材も地元和歌山産にこだわる名店。店主である小林寛司(こばやしかんじ)さんは年に何度も原農園を訪れる。「料理に合う柑橘を探しに行くこともあれば、味見をしながら料理を考えることもあります。原農園さんは種類が多いというだけでなく、全てが丁寧に作られています」と語る。知り合いのシェフを連れて行くこともあり、品種の多さと柑橘の瑞々しさに感激するという。写真は原農園の紅まどかを使ったホロホ鳥鳥レバー、ごま油のサラダ。

Villa AiDA (ヴィラ アイダ)
住所／岩出市川尻71-5 <http://villa-aida.jp>

もう1人の
＊達人



注文が入ってから収穫するため、どれも信じられないほど瑞々しい*柑橘詰め合わせセット。収穫する時期により箱詰めされる柑橘は違う。あまりにも品種が多いので、柑橘には*名札が付けられ、説明書も添付されている。